

会 小 牧 市 医 師 会

医 師

上 村 恭 一

新しい胆のう手術

一九八七年フランスの一開業医が、腹腔鏡（腹の中をのぞくカメラ）を用いて、胆のうの摘出に成功した。この治療法は腹腔鏡に接続可能なテレビカメラが発的に広まり、私どもも一年半前から行っている。今年の四月から健康保険でも、この治療法が認められ、患者さんの経済的負担が少なくなった。

腹腔鏡にテレビカメラ接続

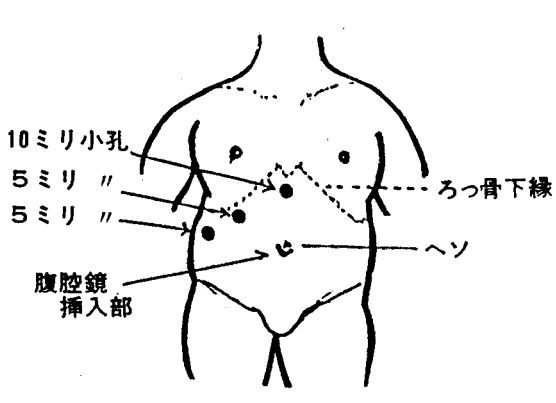
この方法はまず、腹腔を炭酸ガスで膨らませ（一二リ水銀柱圧）、へその近くに小孔を開けて腹腔鏡を入れ、胆のうを観察し、次に図のように腹部に五から十センチの小孔を三カ所程度開け、ここから長さ三十二センチの柄（え）がついた鉗子（先端がはさみ状やピンセット状、鉤状になった金属性の手術器具）を挿入し、これを用いてテレビに映し出さ

れる腹腔鏡の画面を見ながら、胆のうをはがしたり、胆のうに出入りする血管や胆のう管をクリップなどでとめて、切り離し胆のうを摘出するのである。

おなかに開けた小孔から、通常大きく腹を開いて行う胆のう摘出手術とまったく同じ手術をするわけである。炭酸ガスで腹を膨らませて手術を行うので、心肺に通常よりも負担がか

かりがちになる。そのため血液中や呼吸中の炭酸ガス濃度や血圧、心拍などを連続的に監視（モニター）する必要があるし、専門の麻酔医のきめ細かい対応が必要される。

また、強いゆ着や炎症、出血などにより腹腔鏡下の手術が無理なこともある。この場合はただちに通常の開腹手術に移行しないと危険なこともあり、豊富



な外科医の経験と判断を必要とするのである。

多少こうした繁雑さがあっても、この手術法では手術後の痛みが大変少なく、回復が早い。早期離床が可能で入院期間が短い。手術の傷あとが小さく目立たないなどの多くの利点があり、道内でも急速に普及していくものと考えられる。